

心おののく人々に言え。

「雄々しくあれ、恐れるな。見よ、あなたたちの神を。敵を打ち、悪に報いる神が来られる。神は来て、あなたたちを救われる。」

そのとき、見えない人の目が開き／聞こえない人の耳が開く。

そのとき／歩けなかった人が鹿のように躍り上がる。

口の利けなかった人が喜び歌う。

荒れ野に水が湧きいで／荒れ地に川が流れる。

熱した砂地は湖となり／乾いた地は水の湧くところとなる。

—イザヤ35章—

三つの関わり

創世記には、世界の起源について、神は実に秩序正しく世界を造られ、最後に人を造り、人が造られたときには、人が生きるためにすべて必要なものを備えてくださったとあります。人間が作り出したものは何もなかったと。

今日、「被造物を大切に作る世界祈願日」にあたり、ここに創造における、命が生きるために欠かせない「三つの関わり」が見えてきます。①神との関わり ②隣人との関わり ③地球との関わりであり、この関わりを引き裂いてしまうのが、聖書が語る「罪」です。

人が被造物としての限界を認めることを拒み、神にとって代わり、世界の主人公であるかのようにふるまう時、世界にこの三つの「不幸な破れ」が始まるのです。

「第1の破れ」は、人が神に背を向け、神を忘れ、ついには神を無視するようになること。それは、わき役である私たちが、主人公である神を押しつけて前面に出ようとする生き方です。わき役である私たちは、全体の筋書きも分かっていないし、主人公に必要な資質も持っていないゆえに、たちまち混乱が始まるのです。

「第2の破れ」は、主人公になろうとする者が、仲間の中で、どちらが主人公であるかをめぐっておきる争いです。

「第3の破れ」は、人が人以外の被造物との間に生じた敵意です。大地は乱獲による種の絶滅に瀕し、干ばつや大雨や洪水。海は化学物質汚染で、神が造られた非常に良い世界がほころんでしまっている現実です。

「いったい何という事をしてしまったのか」と神をして嘆かせる、こんな大きな破れを人類は生き方を選んでしまったのです。この罪悪は、人が世界の主人公になろうとする限り、際限なく増し加わって滅びるしかありません。人間が止められないこの生き方を止めるのは、もはや「死」しかない。聖書は語り、失樂園の世界の人類に、死を克服して永遠の命への生き方へと、神の愛は人類を招いてラブコールを送り続けておられるのです。



このままでは自滅に向かうこの世界を、神に造られた被造物を大切にして救うのは、身近なことからやがて世界につながる人類の回心にかかっているのです。“大海も水の一滴から” 他ではない、この私から、世界を救う一歩が始まることを信じて！